

受付番号

留学・研究計画書

氏名 川上 英	留学機関名 キンタナロー大学
留学先国名 メキシコ	留学期間 西暦 2009 年 4 月 ~ 2010 年 3 月
研究テーマ メキシコ統合期 (1920・30 年代) のユカタン反乱マヤ	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>私の行なう研究は、メキシコ・ユカタン半島のマヤ集団に関する歴史学的かつ人類学的研究である。ユカタンでは 1847 年にマヤ系先住民の大反乱がおこり、反乱マヤ集団は 50 年以上にわたって半島南東部 (およそ現在のキンタナロー州) に独立の勢力を維持した。20 世紀初頭にその拠点サンタクルスをメキシコ政府軍に占領され、その後のメキシコ政府の国民統合政策の一環として次第に制度上はメキシコ国家へと統合されながらも、そのマヤ集団は、キリスト教やマヤの土着信仰の要素が兼ね合わさった独自の十字架信仰を失うことなく、現在に至るまで生き続けている。これまで、「カスタ戦争」と呼ばれる反乱そのものに関しては数多くの研究がなされてきたが、反乱終了後の 20 世紀の同じマヤ集団の歴史に関しては本格的な研究がなく、触れられるとしても、かつての反乱マヤ集団が武力抵抗をやめて国民国家・資本主義システムの統合圧力に屈して組み込まれていってしまう、反乱の結末として、半ば悲劇的に描かれるのが普通であった。</p> <p>しかし、20 世紀前半の彼らも、武力抵抗はやめたとはいえ、そうした外部からの圧力に対して抵抗したり妥協したりしながら彼らなりに折り合いをつけていたのであり、それを単に「組み込まれた」とだけまとめるのでは、彼らの歴史における主体性を見落とすことになる。20 世紀初頭に開発ブームの始まったチクレ (チューインガムの原料) の採集に参加し、メキシコ革命政権と友好的な関係を結んだ彼らの行為は、確かに資本主義・国民国家システムへの組み込みとしての側面を持っている。しかし、19 世紀の彼らマヤ集団がベリーズのイギリス人からの援助を経済基盤とし、イギリス人を保護者視していたことを考えると、イギリスからの援助が得られなくなった 20 世紀初頭の彼ら行為は、自らの生活の安定を保障するための彼らなりの選択だったと見ることができるし、そう考えなければメキシコ大統領を保護者と呼ぶ彼らの行為を理解できない。</p> <p>当研究は、そのように 20 世紀前半 (とくに 1920・30 年代) のメキシコへの統合期のマヤ集団の歴史を、マヤ集団側の視点から分析し、さらに、彼らがイギリスやメキシコといった権威をどう捉えていたのかという問題、言い換えれば、彼らの世界観・アイデンティティについて考察しようとするものである。それは、学術的には、これまで軽視されてきた「カスタ戦争」以後の反乱マヤ集団の歴史をほとんど初めて詳細に明らかにするものとして重要な意義を持つであろう。そして、差別・抑圧されてきたとされるマイノリティーの歴史を、その被抑圧者的側面だけを描くのではなく、かといって武力による抵抗の側面だけを理想的に描くのもなく、ある時は抵抗しまたある時は妥協しながら外部世界と対話していた彼らの生き方を、ありのままに彼らの視点から描くという作業は、究極的には、「他者」と如何に対話し「他者」を如何に理解するかという現代的な課題とつながっていると思う。</p>	

成果報告書

記入日 2011年 4月 27日

氏名	川上 英	留学先国名	メキシコ	所属機関	キンタナロー大学
研究テーマ： メキシコ統合期（1920・30年代）のユカタン反乱マヤ					
留学期間： 2009年4月～2010年3月					
<p>留学期間中の大部分は、キンタナロー大学のあるキンタナロー州都チェトゥマルに滞在し、主に文書調査を行なった。加えて、数度にわたって、同州内のマヤ地域でのフィールドワーク、および、隣州ユカタン州の州都メリダ、首都メキシコシティでの文書調査を行なった。</p> <p>《チェトゥマルでの調査》</p> <p>チェトゥマルでは、ユカタン半島の文学・教育史専門でありながら、マヤとチクレとの関係史についての研究においても著名な、キンタナロー大学のマルティン・ラモス教授に定期的に指導を受けながら、大学図書館、大学内のカリブ研究資料センター (CEDOC)、キンタナロー州立文書館 (AGEQROO)、文化博物館内のチラン・バラン・デ・トゥーシック図書室 (SBCHBT) などにおいて資料収集・読解の作業を行なった。</p> <p>CEDOC には、メキシコシティの文書館所蔵のキンタナローに関する資料のコピーや、アメリカのアラバマ大学所蔵のユカタン半島史に関するマイクロフィルムが多数保存されている。収集した資料の中で当研究のテーマに直接関連するものは、メキシコ国立公文書館 (AGN) のチクレ関連の資料と、メキシコ公教育省文書館 (AHSEP) のキンタナロー州部門の資料であり、とくに後者は、マヤ地域における公教育普及活動の歴史、ひいては、1930年代のメキシコ国家と反乱マヤ集団との関係を分析する上で貴重な資料であり、大きな収穫であった。</p> <p>AGEQROO には、1950年代以降のキンタナロー州におけるチクレ産業に関する膨大な資料が所蔵されている。量が多いため、必要な資料だけを選びとるのに苦労した。該当時期は当研究の直接の対象時期とは異なるが、マヤ地域におけるチクレ産業の大枠をつかむのに役立った。</p> <p>SBCHBT では、1910・20年代における反乱マヤ集団の最高首長であったフランシスコ・マイの書簡をはじめとする一次資料を収集した。</p> <p>《マヤ村落での調査》</p> <p>キンタナロー州のマヤ地域の中心都市フェリーペ・カリージョ・プエルトを拠点に、とくにティシュ</p>					

カカル・グワルディア、セニョールの両村で聞き取り調査を行なった。前者は反乱マヤ集団の末裔の現在における中心地、あるいは聖地である。当研究の対象時期が1920・30年代であるため、オーラル資料が直接に当研究の資料として使えるということはあまりなく、目指してもいなかったが、20・30年代も含めたマヤ社会を理解する上でいろいろな興味深い示唆を得られた。例えば、複数政党の利害の対立が村にまで入り込んで村の分裂をももたらしている状況を「政治」として嫌う伝統派の長老が、70年近くにわたってメキシコで一党独裁を誇っていた制度的革命党 (PRI) に対して取り続ける友好的な態度は、彼にとってPRIは「政治」ではないということを思わせ、さらに翻って、メキシコ政府との融和を進めた1920年代の首長マイの書簡にしばしば出てくる「政治には関わらない」という言葉の意味について再考させるものであった。

《メリダでの調査》

チェトゥマルから400km離れたメリダは、スペイン植民地時代からユカタン半島第一の都市であり、ユカタン半島の歴史に関する資料も豊富で、国内外から研究者の集まる、ユカタン研究の「メッカ」でもある（ある現地人は「ユカタンのアテネ」と言った）。キンタナロー大学の図書館は蔵書の規模・質においてまだ見劣りがするため、必要な二次資料の参照のためにしばしばメリダのユカタン自治大学の図書館を訪れた。また、キンタナロー州では1930年代まで独自の新聞が存在しなかったため、当時の新聞資料としてはメリダの新聞を参照しなければならない。ユカタン史研究支援センターおよびカルロス・R・メネンデス図書館にて、1910～30年代の新聞資料を収集した。メリダでは、ユカタン自治大学の知己の研究者たちとの交流も重要な収穫であった。

《メキシコシティでの調査》

首都メキシコシティは国内で最もメキシコ史に関する資料の豊富なところである。とはいえ、チェトゥマルから1300km以上、バスで22時間の首都には、しばしば通うというわけにはいかず、一年間で一度のみの調査となった。国内最大の文書館、国立公文書館では、大統領部門・内務省部門において、20世紀前半のキンタナローの政治経済に関する資料をできるかぎり収集した。とくに当研究にとって重要なのは、チクレ産業関連のものと反乱マヤ集団関連のものである。また、国防省文書館では、フランシスコ・マイやキンタナローの歴代知事に関する軍事資料を収集した。外務省文書館では、キンタナローが境を接していた英領ホンジュラスとの国境問題、反乱マヤ問題、チクレ開発などに関する資料を収集した。そのほか、チェトゥマルやメリダで入手不可能だった二次資料を、コレヒオ・デ・メヒコや国立図書館、および市中心部の古本屋街で収集した。

現在、この留学期間中に各地で収集した一次・二次資料の読解・分析に努め、それを博士論文としてまとめる作業をおこなっている。

《留学全般についての感想》

1年はあっという間だ。「1年もある」と考えていたら、何もできずにすぐ終わってしまう。私は以前にも1年間メキシコに留学した経験があり、その時は初めての海外での生活に慣れたり楽しんだりするのに多くの時間を費やして、肝心の研究は最後の数カ月に慌てて集中しておこなった。だから今回は、始めから全力で研究に取り組むことができたのはよかった。それでも、最終的に1年では納得して帰国することができず、現地での奨学金を得てもう1年留まることになった。

2年目に現地で受けた奨学金もありがたかったが、金額の面でも研究遂行上の自由度の面でも、比べてみて、いかに松下国際財団のスカラシップが貴重なものだったかを実感した。例えば、メキシコ史に限らず20世紀の歴史を研究する上でアメリカの国立公文書館は重要な情報源であり、そこでの調査をスカラシップでの留学中におこないたかったが、あれこれの理由で先延ばしするうちに留学期間が終わってしまい、現地の奨学金のもとでは、金額も少なく、出国制限もあるために、アメリカ行きはできなくなってしまった。結果として、最初から2年間の留学として計画していればよかったと思う。

いずれにしても、長期間現地で調査ができたことは貴重な経験だった。日本に生活しながらの短期調査では、どうしても現地を訪れる時期が夏休みや春休みなど、決まった時期に限られてしまう。そうした短期間の調査には短期ゆえの長所もあるが、夏休み・春休み以外の時期におこなわれるイベントや、その土地特有の季節の移り変わり方など、現地で長期間生活しなければ見えてこないことも少なくない。熱帯に位置するユカタン半島は、四季の変化の激しい日本に比べれば、一年中暑いという印象がある。統計を見ても、一年の平均気温の差は5度程度で、その印象はあまり間違っていないように思える。ところが、実際に現地で一年を通して暮らしてみると、15度ぐらいまで気温の下がる12・1・2月の「冬」がかなり寒く感じられる。氷点下の日本から突然そこに行ったら、15度でセーターを着ているユカタン人を笑ってしまうかもしれないが、ずっとそこに住んでいると、ひどい暑さに慣れてしまっているので、セーターも着たくなる。また、マヤ人が古来おこなっている雨乞いの儀式の意義は、長い乾季を過ごし、その絶頂の一番暑い4月・5月を実際に体験することで、さらによく理解できるだろう。

そのような数々の貴重な経験をする機会をいただけたことは本当にありがたいことだと思う。それを単なる私個人の貴重な経験で終わらせるのではなく、目に見える形で成果を社会に還元できるように、できるだけ早く、そして多く、成果を発表していきたい。



典型的なマヤの家（キンタナロー州ティシュカカル・グワルディア村）。



ユカタン半島には山がほとんどない。そのなかでシエラ（山脈）と呼ばれる、標高が100mを超す地域に上ると、地平線が見渡せる。向こうにわずかに見える白い線は、村と村を結ぶハイウェイ。